

7-10

主題 可能性を追求してチームケアで支援

食べる楽しみ

副題 食欲不振により胃ろう造設、経口摂取が可能となり生活の質が向上した事例

その人らしい生活

研究期間 7か月

事業所 品川区立戸越台特別養護老人ホーム

発表者：鹿野 仁美（しかの ひとみ）

アドバイザー：石渡恵美子（いしわたるえみこ）

共同研究者：小野 佑子（おの ゆうこ）

電 話 03-5750-1054

メール santokukai.togoshi-h@proof.ocn.ne.jp

FAX 03-5750-1055

URL http://www.santokukai.com/

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

当ホームは社会福祉法人三徳会が運営し、平成8年に特養72床、ショートステイ8床で開設しました。都内屈指の賑わいを見せる、戸越銀座商店街のほぼ中央に位置し、区立中学校と合築という利点を活かし、地域交流やボランティア活動が盛んです。特養ホームのほか、デイサービス、在宅介護支援センターを併設しています。

《研究前の状況と課題》

利用者Tさんについて

胸椎圧迫骨折で1か月間の入院。ADLの低下はあるが、1日数時間の離床がとれるようになり退院となる。退院後、急性腎不全により再入院となり、病院で食欲不振が続き胃ろうを造設した。

再入所時のTさんは、ほぼ寝たきりで意思表示や会話をするのがなく、意欲の減退がみられた。入院前は、囲碁の雑誌や新聞を読むことが好きで、部屋とデイルームを自由に行き来し、疲れたら臥床するなどマイペースで過ごされていた。また、自分の意思どおりにいかないと介助に拒否もみられたが、それはTさんらしさとして捉えていた。

課題はかつてのTさんの姿に少しでも近づき、いきいきとした生活を送って欲しいということであった。そのために食事を経口より摂取できるようになり、減退した意欲とADLの向上を目標とした。

《研究の目標と期待する成果》

- ・経管栄養の滴下時は車いすに移乗し、離床時間の拡大とADLの向上を目指し寝たきりの生活から脱却する。
- ・リクライニング車いすのから、スタンダードタイプに変更していく。
- ・食欲不振という理由から胃ろうの造設となったので、好きなものから少しずつ食べることで、食欲が出るのではないかな。
- ・食事を味わい楽しみ、好みの食べ物を選択するなど意思表示ができるようになって欲しい。
- ・規則正しくメリハリのある生活を送れるように、新聞を読んだりテレビを楽しむことを生活のなかに入れていく。
- ・食事を自力で経口摂取し、ADLの向上が、生活の質を上げる第一歩になると期待して介護、医務、訓練、栄養の他職種が協働して取り組み、チームケアを確立する。

《具体的な取り組みの内容》

- ・ 離床時間の拡大（21 年 11 月 25 日～3 週間）
退院後、再入所当日より、経管滴下はリクライニング車いすで離床して行う。ケース会議にて、徐々に下肢の筋力を強化し、スタンダードタイプの車いすに変更することを目標にした。
- ・ 医師の許可後、経口摂取の練習を開始（12 月 4 日～2 週間）
退院 9 日目にアイスクリーム、フルーツゼリー少量を摂取。嚥下の状態を介護、医務、訓練、栄養で評価する。もともと甘いものが好きだったので、好物なら食事の興味や意欲がわくのでは、と考えた。
- ・ 昼食の開始（12 月 18 日～7 週間）
経口摂取の練習開始後、2 週間が経過し水ようかんなど、固形物の摂食が可能となる。バイキングの機会を利用し、少量ずつ多種類の食事を味わっていただく。また、並んである料理を目でも楽しみ、自ら選んでもらう。通常量の昼食（ペースト食）の開始となる。
- ・ A D L の向上と T さんらしさを取り戻す
昼食を開始する頃から座位がしっかりとれるようになり、全面的にスタンダード車いすに変更。ボール投げなどレクリエーションを取り入れたりハビリに意欲を見せる。テレビの前の席に誘導したり、雑誌を渡す。
- ・ 夕食の開始と食事形態を刻み食に変更する。（22 年 2 月 8 日～）

《取り組みの結果と評価》

- ・ 離床時間を少しずつ延ばすとリクライニング車いす上で「疲れた」と話したり、起き上がる仕草を見せる。また、臥床中にベッド柵を外そうとするなど、意思表示と自発的な行動が見られるようになる。
- ・ 食器を身体に引き寄せ、アイスクリームに興味を示す。訓練の評価より「頸部、肩の筋緊張はほとんどない。摂食時間が早いので、むせる原因となる。最初は嚥下状態を見極めながら全介助とする」
- ・ バイキング食のなかから、好物を指差し選ばれる。並んだ食事のなかから選り好みできたのは、食事に対して意欲や意識が高まったと考える。また、この時期、他者との食事（常食）と見比べて「違う、不公平じゃないか」という言葉が出る。
- ・ 新聞を指でなぞり集中される。またテレビに向かって独り言を話すこともある。食事は入浴後の疲れがあるときや気分によっては「いや」と拒否することがあり自分のペースを乱されたくない、という意思表示をする。

《まとめ》

今回の事例は、経口摂取を目標に、A D L の向上、生活の意欲に大きな影響をもたらすことができた。人はたとえ高齢になっても、意欲を持ち向上する可能性を持っている。これからも、創意工夫や課題に挑戦しながらチームでその人らしい生活が送れるように支援していきたい。

《提案と発信》

私たちは誤嚥のリスクと戦いながらも、経口から味わう喜びを大切に日々介護している。胃ろうを造設し再入所された利用者に、食事形態や介護の工夫で、まだ経口摂取ができたのでは、と思うことがある。この先も食べることの意味を追求し、利用者や家族の気持ちに寄り添いながらチームケアで支援していきたい。

【メモ欄】 追加資料 有 無